

1994.11.27

池主教に人を送り、民青学連の関係者たちに
被せられた共産主義者という濡れ衣を取り除
くように求めた。池主教は日本で記者会見を行
い、自分が民青学連に活動資金を与えたと
表明し、公安当局の政治宣伝に向かつて対決
した。

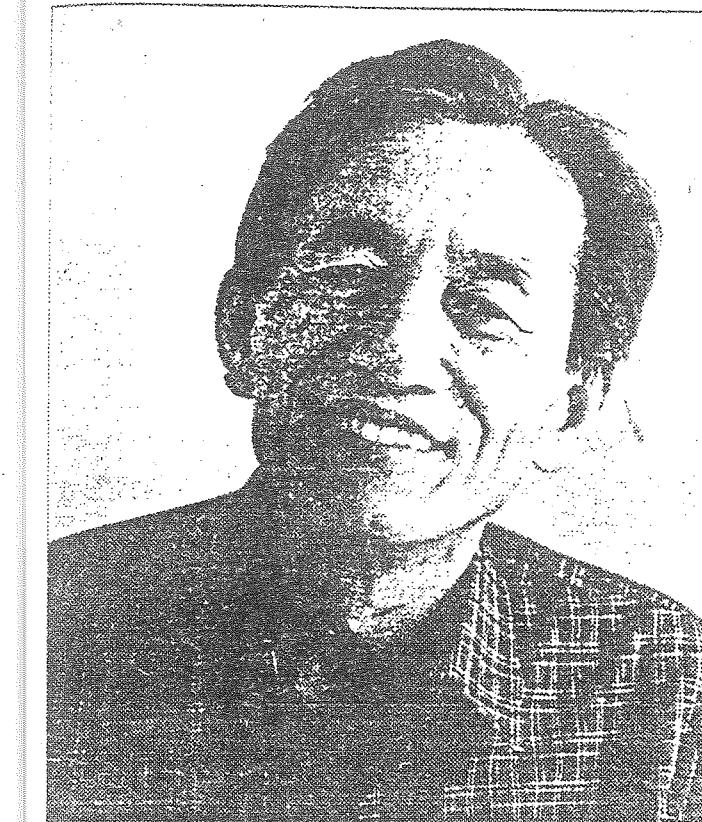
一九八三年からハンサルリム運動の本部を作
り、朴才一氏、金芝河詩人らと共に、生命
思想実践運動に専念してきた。

一九九三年には李賢柱牧師と共に老子の
「道德經」を今の現代社会に照らして解釈し
た「老子の話」一・二巻を出したが、ガンが
再発したため、終巻を出すことができないま
ま、この世を去つた。

●
張壹淳先生と親交の深かった李泳禧先生の
書かれた追悼文を別頁に掲載する。ハンギヨ
レ新聞に掲載されたものである。

李泳禧先生は、一昨年の学生センター二十
周年の記念講演に来て下さったが、「転換時
代の論理」などの著書で著名な方である。最
近、「転換時代の論理その後」というサブタ
イトルのつく『鳥は「左右」の翼で飛ぶ』
(図書出版トウレ)を出されている。七月に
初版が出ているが、一昨日キリスト教の在日
韓国人の人権委員会の会議でソウルに行き、
本屋に寄るとその15刷が横積みにして置いて

1994.11.27



韓国原州に 張壹淳先生の墓地を訪ねて

飛田 勝一

韓国の「在野の元老」として知られている張壹淳先生が、今年五月六歳。ガンであった。張先生は韓国カトリック農民会などとともに二回神戸を訪問されたこともある。書堂家としても知られている張先生の書は学生センターの主事室にも掲げられている。ランの花と「富國の花」を訪問されたこともある。書堂家としても知られている張先生

都城之榮華不如野花之樂」の文字が書かれたすてきなものだ。

張先生の書は、お金を払えば書いていただけるというものではないようだ。あるとき張先生にいやな(?)金持ちが「お金はいくらでも出すから」と自分の石碑か何かにと頼みにきたことがあるという。張先生は書いてから「一百万ウォン(?)」を請求したらその金持ちが、高い文句をいった。先生は「いくらでも出す」と言つたじゃないかと、お金を出させて運動体にそのお金を寄付したことがあつたという。張先生らしい豪快な話だ。

●
張壹淳先生の経歴は、ハンギヨレ新聞の追悼記事によると次のとおりである。

一九二八年原州市で生まれ。ソウル大学の美学科に通つていたが、朝鮮戦争で学業を中断。一九五三年、二十五歳の若さで大成学園を設立し、初代校長を務めた。一九五六年からは革新政党である統一社会党に参加し、二回にわたって国會議員選挙に出馬したが落選。一九六一年5・16軍事クーデターの直後には平和統一論を出張したとの理由で三年間監獄に閉じ込められ、出獄後にも長い間当局の監視下で隠遁生活を強いられた。

幼い頃に洗礼を受けた張氏は、カトリックを土着のものにし、儒教・仏教・道教の伝統思想を探求しながら、共に生きる生き方を重視する生命思想に発展させた。書道家としても優れた実力を發揮し、六回にわたる個人展を開き、その収益金を良心囚の生活費や生命運動の資金として寄付した。

一九七一年、亡き池学淳主教と共に朴正熙軍事独裁に反対する街頭デモを主導し、このデモに刺激されて民主化運動に参加した学生たちが一九七三年民青学連事件で多数投獄されるや、彼らの釈放運動に力を注いだ。張氏は、當時ローマから日本を経由して帰国しようとした

あつた。

●
張先生は、兵庫県市島町に住む有機農業運動のリーダーの一人である一色作郎さんと親交が厚く、「兄弟」の契(?)を結んでいた。その一色さんが、是非兄貴分のお墓参りに韓国に行きたい、日程は飛田さんに合わせるのでいつでも連れていいってほしいという。一色さんは、学生センターの評議員でありまた学生センターが今年五月より始めた「農塾」の塾長でもある。「義をみてせざるは……」とかで、同行することになった。一〇月一八日から二一日までの三泊四日の二人旅で、ソウル、原州、ソウルに一泊づつした。



張壹淳先生の墓地の前で

左から張壹淳さん、一色さん

●
張先生だが一色さんが話し出すと、その内容がよく聞き取れないのである。兵庫県の北東にある市島町で農業を営む一色さんは方言がきついのだ。おまけに農業の専門用語がポン

1994.11.27

民主・統一の花 とうとう見られず
—張壹淳先生の靈前に涙で告げる—
李泳禧（漢陽大学教授）

謹んで亡き一栗子張壹淳先生の靈前に捧げます。

先生は、この国の民主化のために先生の教えに従い軍部独裁と戦つてきたすべての同志・後学・後輩たちの熱い祈りの甲斐もなく、この世を去られました。野蛮な軍部統治が終息し、もうすぐ民主主義の幕が上がるうとしているこの時に、先生はそんなに熱望なさつてきました。民主主義の花が咲くのを待たずに行かれました。悲しいです。悔しいです。

先生が初めて病床に伏されてから三年間、私たちには神の加護と私たちの熱い祈りで必ず病魔に勝たれ、以前と同じく温かく微笑む姿で私たちの前に戻つてくださることを堅く信じておりました。眞の民主主義の実現と統一への道に入ろうとしている今日、先生の訃報に接し、目の前が暗くなり涙を拭くことも忘れるくらいに呆然とするばかりです。どうしてこんなことが有り得るのですか。

振り返つてみると、先生は大韓民国という国家と社会が快く受け入れるにはあまりにも高潔でした。病んだこの時代が先生を喜んで迎えるには、先生はあまりにも正しくまつすぐな生き方を貫ねかされました。

邪悪で汚れた者らは、喉に刺さった骨のように先生を避け迫害しました。しかし、そうすればするほど、先生のいらっしゃる江原道原州市鳳山洞九二九は、人権と良心と自由と

1994.11.27

人金芝河氏、金正男青瓦台教育文化首席秘書官、李敦明弁護士、言論人金芝河氏、金正男青瓦台教育文化首席秘書官、李敦明弁護士、言論

民主主義の大義に身を捧げようとする大勢の人々が訪れる小さな聖地でした。本当にそうでした。

世の中がすべて寂莫で息声も出せないほど恐ろしかつた去る三十一年間、先生は原州の自宅を訪れる人々に、彼らの願うすべてを与えた。戦う前線でとまどう者には勇気を与え、戦いの方法を摸索する者には知恵を与えました。懷疑を告白する者には信仰と信念を与え、方向を失う者には思想と哲学を与えました。先生は、いつも功と名譽を後輩に回される民衆的先覚者であり指導者がありました。

原州の草が生い茂つている自宅は、軍部独裁下で熾烈に戦い疲れ果てた同志たちが訪れるオアシスであり、先生はいつも傷ついた身体を慰める慰労の手でした。

張壹淳先生。

先生のその教えと愛がなかつたならば、この國の民主化・反独裁闘争は、一九七〇年代に先生が悲壮な火を高く挙げられた状態からあまり前進することはなかつたのです。一九七一年一〇月、カトリック原州教区が亡き池学淳主教を先頭に、朴正熙政権の不正・腐敗に抗う一大運動を開いた時、遠く離れた私たちにそれは無謀なものに見えました。世の中は、その感動的な決起の陰に張壹淳先生がいらっしゃることは全然知りませんでした。

原州教区で先生が指導なさつた、生命（自由）を抑圧するあらゆる抑圧に対する抵抗は、直ちに一九七三年の民青学連事件としてこの國のあらゆる若い心を脈動させ、全國のカトリック教会と宗教界の一大抵抗運動にまで拡大させました。学生・青年・宗教者の反独裁

運動は、眠つていた労働者・農民を覚ませ、やがては全國民的反独裁闘争のための燎原の火の如く広がりました。

あらゆる段階のあらゆる戦いでもその前列に立つたのは例外なく先生の分身でした。それは今も変わりません。今後、眞の民主主義が実現される時まで、そして統一ができる日まで、先生の愛する分身たちがその居場所を離れることはありません。先生、ご安心ください。

張壹淳先生、お目にかかりたい張壹淳先生。

先生は、一つの時代を変革なさつたその大きな業績にも関わらず、一生を「一粒の小さな粟（一栗子）」を自任しながら生きて来られました。原州市鳳山洞の陋屋でたた墨と硯と筆と画仙紙を友に、一井の土としてその生涯を閉じられました。本当に高潔な一生でした。

張壹淳先生。先生が六年前に創刊を喜ばれ、そのための煩わしい仕事を快く手助けください。一生先生の世話をし、長い看護に疲れ、また別れの悲しみに涙を隠せない夫人・李仁淑女史と三人の息子さんたちとその家族を天国で見守つてください。

先生を尊敬し愛し從つてきた後学のものが謹んで涙で告げます。

一栗子張壹淳先生のご靈魂よ、どうぞ永遠で安らかにお眠りください。

一九九四年五月二二日

ポンと飛び出す。やむなく同行の神戸大学の保田茂先生が、「一色さん、張先生も『赤とんぼ』を、「これは本当に名曲だ」と言って歌つておられたのを憶えている。

旅の一日前は明洞に宿をとつた。いつも鐘路あたりをウロウロしているので気分を変えてみたかったのである。明洞のホテルで落ちあつた神戸大学の留学生でいまは韓国の生協联合会で働いている金起燮さん、延世大学の語学堂に留学中の小林知子さん、そして一色さんと私は、夜、尹靜慕さんとお会いした。尹靜慕さんは『母・従軍慰安婦』かあさんは「朝鮮ビー」と呼ばれたー』（鹿鳴節子訳、学生センター出版部刊）を書かれた作家だ。韓国では初めての高級日式料理店でご馳走になつた。小さな白いご飯の上に大きな刺身がデンと乗つかつているお寿司などへであった。

翌日は、金起燮さんが車で原州まで案内してくれた。前日の金起燮、小林、一色、飛田の四人組みである。原州は、池学淳神父が活躍されたことでも知られているが、カトリックの勢力の強いところでカトリック農民会を中心としたハンサルリム消費協同組合の活動も盛んなところである。まず池学淳神父らが創立した真光高等学校を訪ね、現在校長をされている張先生の弟・張華淳さんにお目にかかつた。弔意を述べてから張壹淳先生のご自宅に奥様・李仁淑さんを訪ねた。その家は張先生の訃報を訴えるハンギヨレ新聞に「在野の人々が疲れ果てたり、独裁政権に追われる時に、訪ねて泊まりながら再び意志を整えるオアシスのようなところであつた。全国連合常任議長の李昌復氏、詩

人宋建鎬・李泳禧氏、金德龍議員など、当時張氏の自宅を頻繁に訪れたひとは各界にのぼる」（94年5月24日）と書かれているところである。

張先生が夫妻で日本に来られたときもあるがその時は二人で一色さの家にも泊られている。張先生の家を辞し、張華淳さんとわれわれは郊外にある張先生の墓地にお参りに行つた。道路から一〇分ほど登つて、おそらく風水地理にかなつた見晴らしのよいところにある墓地に着いた。用意してきた線香、酒を供えてお参りをした。わざわざ日本からお墓参りに訪ねてきてくれたことを張先生の奥様や弟さんが喜んでくださつた。

翌朝、金起燮さんの運転でソウルに戻つた。午後には尹靜慕さんがひとときを過ごした。一色さんや私も以前にお目にかかつた方もおられた。

鏡ではそこをゆっくりと歩く四名の人も見ることができた。また私は、臨津江と漢江が河口ではひとつとなつて黄海に流れ込んでいることを初めて知つた。

一夜にはハンサルリムの朴才一さんらが、会員の経営する江南の芸術の殿堂の近くの焼肉屋「有機農産物韓式店・金山」で歓迎宴を開いて下さつた。懐かしい旧知の人々ばかりだった。散会後、明洞のホテルに戻つてまた一色さんと夜の街でビールを飲んだ。

今年中には張先生のお墓参りをしたいと言つていた一色さんも肩の荷を降し、私もそのお手伝いをできたことに満足することができた今回の旅であつた。